復雅
奇詩

自來也後編 三

へ13
3329
9

門へ13
3329
9

親孝行咄 自來也說話後編卷之三

武江 感和亭鬼武著

大正十八年九月寄贈
本大學出版部

自來也再到安房國併上総國百首邑大見屋茂八家族入条

斯く自來也と大儀の曲輪あく身を躲—一先三浦の沖へ立歸り
志ゞ此處おあり し事兼ねく吾川糸男ありの所へいはくや浦
人の来るんも面倒なり下ゝ上総の國へ赴と遣跟再ひ安房の
國お到らんと想ひ ひ ぼ ま バ志ゞ ー 倡吉郎ハ上総ふあり ゝ 赤天眼
義兵衛法師となり居られ庵室へ遣ー 吊も跡よりその邊へ
趣くんとおりハ處へ小賊ども朝妻歌之助を延連ゝ動靜ハ

見つゝ説話小噺唄ふ加へゐんと歌之助俱ゝ願くべれば自来也打笑ひ越後路より関乃びくれ刹那屋敷の滿魂ようなる偽しも必定其刹那を取逃おくも做一さんれ奴ゐんが手が業ふくハ人の素姓を糺めも及ばど落縄尽くもそんも一與小噺唄の中へ加へ呉んこゝゆと容ひ勤めよとありけこば歌之助大さふ欣躍くゝ

ら〳〵首領手を鳶賊と做〳〵ハ今よりハ洟痛間の家扶おゝ〳〵ハのとより武勇も一騎當千とおばゝれよ昨夜列位ふゝ

巻已し期なるも某事ゝも存せと廣言を發ち敵の心ふとり

ゝ〳〵んとせ〳〵ど謀計相違のゝり悪く持病の癇癪起ゝ遂ふ

手込ふ逢ひ半点不呉ハとりけゝ〳〵ゝも強勇の列位一同ふ親方

と成ゝとゝる上ハ敵ぶふ茶弱ふそゝ〳〵べ更ふ恐怖ことなれ大丈

夫の某今よりハ首領の片腕ゝも憑ミのゝと今ふ始めね痴漢の

大言自来也苦笑〳〵〳〵打點何さ牛ゝ噂よりハ大痴漢醫散の

保養ふもなれゝゝ者今日よりハ汝ゝ勇氣を憑むなゝんと酒

汲ゝ〳〵衆皆笑ひを催〳〵けれ偖且其后自来也〳〵安房の

國ふいゝゝ鋸山といゝゝふ權〳〵身を躲〳〵ありけゝふゝ或時小城

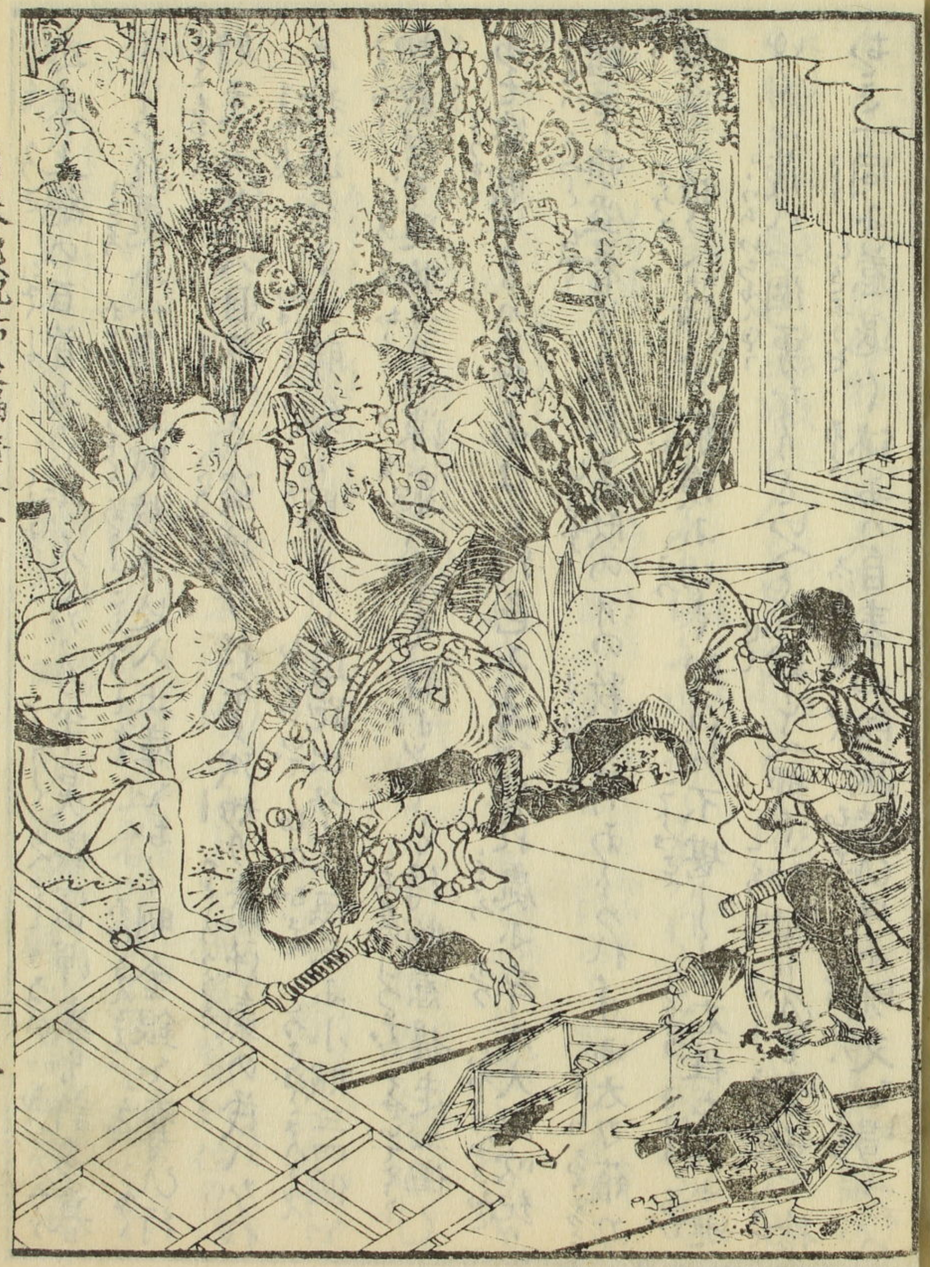
を集ゝゝ〳〵〳〵〳〵上総國天羽郡百首邑ふ大見屋茂八といゝる

の酒問屋ふゝ〳〵猟船も救多ゝゝ家富ゝるゝのと聞ゝれゝこの

程の聲氣ゝゝふ押入金銀を奪ハんと其手筈ふゝ

必定けれ此大見屋茂八といゝゝるのハ元由緒ある武士の果ゝゝ

自来也
大見屋茂八
家ゟ捧入圖



近来上総の百首わく街人となり半泉家富渾家も許多暮
しまれる處ハ一夜盗賊数多込入土庫をおし明金銀を奪ひ行
時主人茂八目そんく盗賊なれこそ知り素法氣の茂八なれ
ど枕邊なる大腰鉞を取ア〳〵退跑出ず二無三ハ小賊三四個を
切散せば這物音ハ渾家の者ハ我も〳〵と得物惹提走出働く
あで盗賊ともハ〳〵あはし引色ハ〳〵ける處ハ卒ハ大風吹紀り
鎧甲頭盛着〳〵なれ妻敗のハの数百騎あ〳〵れまみ太刀薙刀
鑓など雑へ茂八の家族ハ切〳〵かれハ不堪〳〵右往左往ハ逃
ゆくハ茂八一個勇なりといくも詮なく那くなるも金子を捨
もさ一同ハ惹退く跡ハ自来也印式結びにハ呪文を唱へ

忽風止く妻敗の物も消失ゆれど仏僻静ハ取出せ〳〵金銀式
小賊ハ脊負せ立帰らんとせれ折ら傷の畔れはうりまる
首領〳〵平と捨行るハ俱ハ連行〳〵ゆれとる掛れあぞ
誰やらんと立寄ゆれハ朋妻歌之助田ハ落入り顔もも足も
泥ハやぐれく不起立ありしれゆる自来也も果ま果さ〳〵
憶病なれ奴うな必定良今の妻敗のそのハ忘怖腰を抜せし
なるんと嘲咲〳〵歌之助やう〳〵ハ起〳〵いら〳〵首領の答ハ
のこく〳〵平今胴をなけぐらハ手練いほ〳〵と備尊覧列位の後
詰なるあれ處ハおりハ掛ぐれ妻敗の武者の顕ま〳〵を歓とて
誠んか足踏ちんく〳〵踏外〳〵畔より泥田へ轉び落起立ん〳〵

想ひしづこゝや持病の疝癪あるとり詮さぐるく首領と呼ぶて
こゝふなりと大汗流しく語くあぞ自来也小くく癖ふあい
泥ごゝたの猛勇の若冠も勝ぶくたふや是非もなし且このゝ人
ともふ味方危き事あれば今霄のごゝた美敗のものおかゞぶと
種くの奇怪あゝぶうあゝ心ぞ疝癪起さすゞと衆皆一同ゑ
絶倒しくく歌之助り涙ともふ錦山へぞ延とりね

千歳歴代く衣愛押併狎亡身報恩条

茲ふ一ッの奇なる話ありけれを大儀の曲輪ふ歳屋代く衣ハ
全盛日ふ増しこの頃の名取仕掛女となりきれが平日狎次
愛くく揚家ふ到るふも這と抱うさまてしも則とてなるとゝ

ナッの代く衣の愛せる狎ハ黒斑の男狎ゆり錦繡を首ふ纏ひ
金鈴付けくく教ひまるふ深く代く衣ふ則跟朝昏傍ふあり
くく大座より好ふ出ぞ国ふ入くも夜着の衣間ふありいと神妙
なりとくくいくぞねハ其愛猶ぬゆし則へゆくるふもとふ狎跟
添ひくく耳ふ若とれば入ぶれば対ふ泣叫びくく喧しきれぞ
厠の中ゆくも連ゆくふなりね此とく遂ふ曲輪ふふ夢え
く人く皆つふ代くぞねふ狎の看ふくく千歳の主人ふ至と
関く代く衣ふ狎と愛をはぶれを固く制ふふり代く衣も人く
の風説ふ懼ひくく遠ぶくれぶも此狎只顧慕人離ぶぞかこら
なれ人とれと追退ぶくも泣叫びく撃杖の下よりも代く衣ハ

千歳屋
代々衣押を
愛も蜀

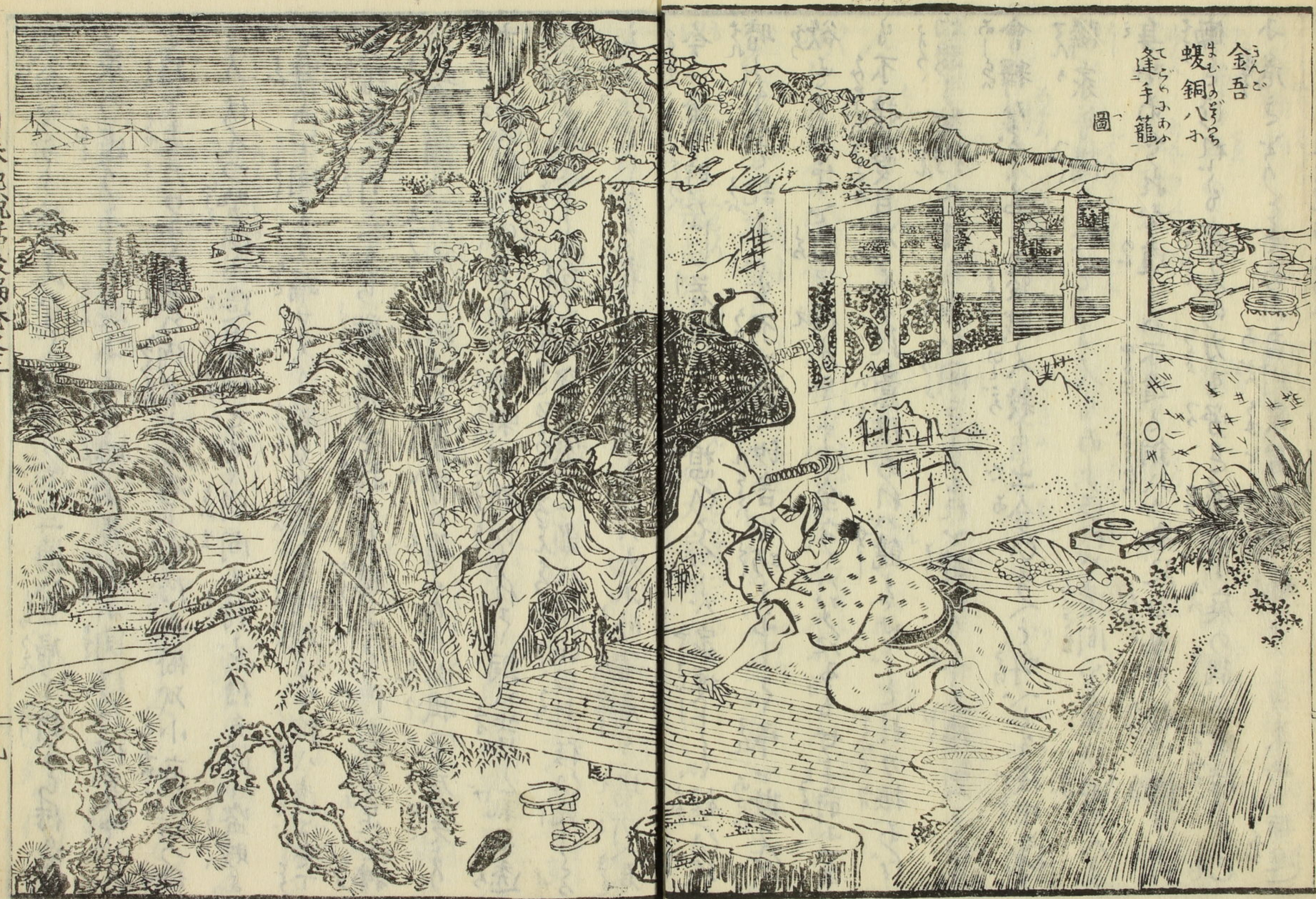
裸へとり付きくびれが今を為み歳の渾家ゐも怪し疑ひ〻押入打
殺さんと計ひ為れ〻代〻ぐね厠へ到りしを何かまゝかの押
走ゐつ〻同じく厠ふ入るんとせしを傍の人危下を以〻うら
拂ひめれば其の首を飛ぐ厠の下ゆ潛ひ胴ハ残ひ〻戸ぐらふ
あり代〻衣大ふ驚き跳出くびとば人〻その首を捜求ふ厠の
下ふ大なる蛇死食つく死し居り衆皆手を拍く押の忠誠を
感ぜり是蛇の代〻衣を覩着しをとゞ罪かゝ押を怪〻
殺しぬ其ハいと不便なりとて代〻ぐね常〻なげきこの餘り其
戸を寺院ふ葬ひて塔ゆ建く如是畜生發菩提心とぞ

綾嶋金吾逢難併吾川采男救金吾条

復爰ふ相州三浦みありしゐふ綾島金吾と女児の泉代金ゆ
〻〻吾川采男の病ゐも平愈做しめれば吉と謝せんと
采男を大義ふ到ひて當一個家ふあり〻今日も暮ふ及ぐぐも
采男帰ひてあるざれが戸帶をかゝめ燈を點ど佛壇ふむひ
念佛唱つ〻ありしゆ為處ふ那大磯の甲〻頼者襲の銅八兵ふ
傳兵衛の女児を賣〻る金子を奪人とせしを士ふ支へらを
空〻〻過行ぎれ亦この程金錢を〻ひたこ〻ゐ〻ゐのるを
想ひ出〻いまゞ日間もあるざれハ那金子ゆ兵衛の手ふあんハ
必定なり何卒奪ひ取らんと此夜暗ふ此家の戸外ふ入り

内の動静とうかゞへば前後ふ人も那く内ゐハ傳兵衛一人念佛の声のこゑゆゑ折ふしと門に固辞明くらふ入り一心不乱ふ念珠繰居る傳兵衛を捕へ押へ声山〳〵そなたゞ喜一討と腰なれ朴刀抜放〳〵いつくに汝前ふ女児を賣〳〵ゑ分ロも渡さぬ剣さへ士ゑ憑ふと憂目ふ逢せ一代を今冥こそ速ふ金子を残らず渡さば祐け金ぞれさるくば身躰躁子切呉んと白刃を閃うとゐぞ傳兵衛も詮さべ形く悲へぐ叫〳〵く斯なれうへハふ金銀ゑ貯へ何うせん手元ふあんん汝ハふぞれなれども其金を大切の主人のためふ女児の身を賣こゝを切く高き薬品ゑ求め主人の大病平愈ゐさしめ之ぞ

今一金も貯なし若いつくりと想ひくべ家捜〳〵く疑ひゑ暗〳〵ゑ詑ぶも不兼引汝言と巧こふ〳〵ふ吊と欺くと欲さ〳〵も吊を誑ゑ得んやよ〳〵金ゐくいなゑもせよ前ふ一金も不接憂目ゑ見ゑ意恨あれば饒ゑせゞと刀振あゞ切眼〳〵ゑ侍兵衛も身を開これを避ゐ今ふ棒ゐ〳〵く會釋なく〳〵やよ盗賊人殺〳〵出合ひまくと叫べぐ夜中とい隣家も闇りたとる人もあ〳〵ぐれば透間を窺ひ逃出んと身をあせれを道〳〵ハ不遣と銅ハゞ打込白刃ゑ抜つ潜りゆ働きほれども老人の力も労ゑ遂ふ小庭の隅ふ追詰〳〵ゑ已ふ危さとりこそあれ吾川采男ゑ大儀ふ〳〵自来也を捕進


金吾
蝮銅八ホ
逢手籠
圖一

残念なるべき詮なくはあらじとや三浦へ立帰る折から侍長藤
が家の邊りあく遥ふ人の叫ぶ声幽ふ聞ほけ何度ゆふん
と路を走戸口ふ入るべ何者もあるべど侍兵衛尉小庭ふおろ佐
うり伏んづ勢ひふ這者何ぞ〳〵問も待ど侍長藤が盗賊よ
と呼ぶを聞より踊て入り腰刀抜く切跟〳〵と銅八透さぬ下
度請留二打三うち戦ふ所を持れ棒ふ〳〵傳長藤が足を拂
へば蝮の銅八尻居ふ肝づを采男八得〳〵と跳掛て肩先より
大袈裟袈ふ乳の下まぐ嘸喇喇新切れ〳〵銅八苦〳〵乳ふ透
逆回る仆起〳〵も立ど心窩一突七顛八倒治田打狂ひ死〳〵る
そ公地〳〵とそ看へふまれ侍長藤が大ふ欣躍危き場所へ君

あ〳〵せあひ〳〵故辛き命を拾ひ〳〵始終の動静を説話ふ采男
も俱ふ歓ひ〳〵去あら人と過〳〵我なれば此家ふあり〳〵事言
かん充れ病後ゆゑ今すこし保養做〳〵筋骨健ふなるん
ゆゑ諸國武者修行と号し捉捕〳〵さる盗賊自来也の行衛ゆ
捜求搦捕夫を功ふ帰叅をねがん所存なれども夫まぐ此身
を何所ふ置んとありるれば傳兵衛い〳〵〳〵侍ひ女児も大張ふ
おつく憑ず〳〵敬〳〵べらんは那方へ侍入あり兄ありと他ふ〳〵せ
曲輪の中ふ借宅あつく今半臭藥養然るべ〳〵這こと原
来女児ふおるくも変して麁畧ゆはじとやふぞ迎も親子の
人れ世話ふあづれ此身なれば這より遥ふ曲輪ふ到り代〳〵衣

と高義せん復銅八の光彫をこのほゝふ置かどけるだ人
あらぶと海へうつ込捨んはく扇ふ惹掛傳兵衛ふまうれて三浦
をたら出まるれ

吾川采男到大磯曲輪併小厮得助討却而両個

結縁条

うれい采男ハ三浦を出く大磯ふ到て代く衣ふ對面做し暗ふ
動静をそのがうり身の上を憑こわれば代く衣こ絡よく諸ひ
主人長助ゝじめ渾家へも兄なりと詐て曲輪の中ふ小家弦
補裡こうふ住居做こせとと世帯一式代く衣より絡ひこぐりぬ
且茲千歳屋の小厮ふ得助とくる漢子いつとなく代く衣ふ

ぬゝく意慕〳〵ありけれが全盛の代く衣小厮の分々あくを
公中言出せることも及ばれハ一個こ絡をいるゝ熟く案じまづ
らひ不圖想ひ出しけれハ守宮を酒ふ浸一人ふあうれば勿ら
意慕の情發てその思叶ふよ一兼〳〵及び付ると此計を行人
と處〳〵を捜求こ女男ハ守宮をまふ入ることれを黒焼となして折
を窺ひまこれが一日代くぎれの大座へ神酒徒く呉ぎよとありけれい
僥倖ひと得助欣躍神酒陶の中へ暗こふ那ち宮をいれ置後刻
這を下んこと代く衣ふ与へ倆もその餘りを呑ぎやと其計ひ
做〳〵おて今日こそ我戀成就せあと内心欣悦ありしとぞ然つる
此日采男こと代く衣の大坐ふ到て福ひ客もあふぐれい四下山れ

説話の后采男の必ずく予その許親子の深情届き薬養
怠らざれゆ急須日身躰健うふ成ぬしおぼめれど近江ふ他邦
ふ出んと乞掛そぐるを詰りけるぶ代く衣も歓び涙身せ来油断
なく堅固ふ慎くもふより花討の病ふも不日ふ平愈せることと
妾ふおわくも何ぞ悦舗こそそぐ夫ふけき今日ハ君の病難
全快ありし壽くて神酒と使へ置くふくばなるも涙身息災
延命守りのくを神酒ふ下く君ハ進くせ妾も願成就のこと
なれば余りと頂きそぐんと那得助の使へ盃くれ神酒徇を下
ー采男ふ与へその身もそれを呑くるひふ身の健うふなりなる
を賀ーなりしぶ不審なれる這まぐく采男代く衣くても主従

の因ものみふく實情を盡くすとも色ふ延くくの意あふぶり
ふ此酒盃呑よりも両個くを誘とそれやくく累ふ憲慕の情愛り
ふ意底停めくくん督せぶ密や鎌倉一と図へくれ風流漢子
の采男ハ容貌復曲輪ふ當時双びなる全盛の代くぐんね美
容の顔月の眉秋波の睠艶なれ雨をもひくくる海棠桃李の
粧ひふ采男も今ハ堪かくーー代く衣も今更ふけるぐ外ふ顕ひし
まひの眼中情を含くく勤の身ふも真實ふもるくる時くを面嘶氣ふ
采男ふ宮ふくくひくくく君ハ程なく他邦ふ出んと命せられど兄
身くくもあふね身の勿躰なれ度なぐく涙主人くも兄上くくと
力ふ想ひそぐれどそ恩ふ掛ものくくれふ不非ども神ふ誓ひ

以酒寄特
代し衣采男
憲暮の圖

醫師城憑こゝろみぐ〳〵ゑを尽し〳〵れ其甲斐ありて病人の平愈悦ぶ間もなく〳〵客路立〳〵ハ難面命君ハ別まさせ〳〵せく跡ハ殘り妾ゞ身ハ何烟との憂勤め半夜ハ〳〵絲を志ろ〳〵もせと泪ハむせぶありさまハ采男も脊を撫さすり奈何なれ変うまと〳〵ても今更其方を振舍〳〵他國ハ出ても名殘惜〳〵これ〳〵厚き情のうへ其志を忘かゝハ包みうゑ〳〵れ我心腐も推量あらば二世うけ〳〵女夫となりて孫んやと手ゑ惹もれば代〳〵ぐゝ主人ハ意慕の其うへハ女夫ハ〳〵〳〵勿論ゝ云ゞ〳〵兼ハ吾身をも不便〳〵おぼ〳〵せ〳〵ハ傳聞の伽ありと勤〳〵ゑもうち忘れ采男ハ心死と抱き跟實情〳〵綻びに

果の乱れ穂ハ出〳〵薄尾花ハ意風ハ練れ一章ハ〳〵る中〳〵放れ〳〵かゝなる風情ハ〳〵這より遂ハ両個ハ偕老同穴の契りをゝゝへ結びまれ

於上総國破鼈之助の妹ハ憑病而死併汀亡靈

娼婦代〳〵衣喰殺条

安房國鏡浦ハ〳〵〳〵倡吉郎仇討の期附添あり〳〵自未也の小嘆唄天眼礒兵衛〳〵其場より道世〳〵上総國百首の辺ハ庵室を結び鹿野苑軍太夫の後吊ひ行ひ清〳〵〳〵あり

ワれが自来也ハ前ハ〳〵浦の沖ハ〳〵〳〵汀を擒ハ做〳〵ハ〳〵〳〵茲石堂家の近臣万里野破广之助の妹〳〵関〳〵〳〵色ハ事寄せ

捕へ来て石堂家へ入込ひの念願あれば人質のこと絶ふ停置
きゝども吾傍身さへ安きてい色ふ沉るの比判も如何と天眼坊と
憑こ暗ふ上絵の國へ送り遣し置ねこそ然うふ汀へ捉且と
なりしより一間ふ押込てれ逃出ぬうやうも形く嘗且夕吾川采男
の支のこと想ひ續け慕ひ仕りしが遂ふ病のとなりて今へ
るのこせ数ふくぐもぐ天眼坊も意外ほりし復侶吉も大の
所ふ手ありわもこハ俱く力と跟醫療をと尽とといへども
験ふく憐むべし汀ハ采男と慕ひ憂病く絶ふ空く成わ且
ぞ侶吉天眼坊も怒れを催し跡より汀付此度自来也の方へ
ずし遣ハせふ自来也もこれを歎き僅ふ女一個外人質こ
停めあれ殺せふ吊一生の誤不便のこを做せこて遁薄料ふ
許多天眼坊こへ遣り後懇ふ吊わせこなり偖も采男
代く衣ハ深く則深こふ徒し他し眼あもほき兄といへれそ
詐ふく實ハ夫ふくあくんなど喝せこわどにあり一夜
復代く衣采男と囲中ふ忍び入且枕なべく外く居りしが
丑満の比ふ采男不圖枕邊を看こふ絶い行く汀の顔
色青ざめ髪揺乱く痩果こて容象ふく恨めげふ采男を
看詰ありこれば其方ハ汀ふてい如ふ騒ぎ刎起んせ
ぜく驚ふ象ハ其ま消へ失て影ぶふへど此時代く夜を目
覚て何いかぶこと問ふく采男へ嘗夢ふ襲ハれくとのこ云

紛らしその夜を何度もあくがれ別れをあけ方ふすこ明夜は代く衣一個ありけり。大座へ行の幽霊昨夜の容象ふく立形はけはしく代く衣ハ大きく驚き這者誰人ふ侍ふやこ問れ声悲しく沉声音ふくいつくしく清身不知や妾とそ石堂家の臣ふ万里野破魔之助といつくしの妹汀とく采男どのと二世の誓を固め比翼の契り浅結びしく須之浦の沖ふく賊ふ捉其期ふく采男どのとおろ別をし妾ふ上総の国ふ擒成くありけれが憑し床しく朝暮吾川どの浅慕ひ申つ遂ふ病ふとなつく此ひど身はのり侍ふ男とふの難面今ハ疾吾身の度ハ見外ふなく其許と契り浅結ぶ怨もさよ

さりながら采男どのよ斯るうけのありしるあらぬ其方ハ是非もなく此うく想ひとぶり玉ひ亡後も吊く行べ復斯るの浅その上ふも両個の中も絶ぶれハ今より后ハ其許ふ慢を晴しやんで忍く此后ハ采男どのと契りを結ひあられるま這事憑ますいくせんと容象を顕しやく始く見る両個の中泉れ毛ぶちく代く衣ハ懼しなく汀ふむひ侍両個の中ふ形れ度ありしと夢聊も忘ぶりしが度度ひしふ身ふつまされく何ひと悲しくるを彫りさぶりしなりさぶる妾のやこも一通り見く行べ賤しく勤の身ふ行べくとのしハ主人の采男さま不思議の縁ふ繋れく我家へ到りるひ

汀の霊魂
怨念
怨恨
代々衣図

ちよう此身を贖ひ痛のを救ひまいらせーゞ何しの馴くゝ下紐も解
初しくゝ此人より対ふ男ハ持ちぢと夜毎日毎ゑ絶間なき世界の
客へ空言も一個ゑ盡を動の實今更那人に振舞くゝ何娼しこふ
存へ行ぶん浮身ハ迚もこの世を去ゑへバせめくゝ浮世ふあるうちと
采男こゝを妾ふ為ゝ末未ハ身の夫と做し此こと関沢ゑひ
うのバ追薦供養急り形くゝ我くゝ吊ひまいらせんと手を合されバ汀の
亡霊うけひうと不ゝよ今もいまだくゝ采男ゝのをこと妻ゑ添せん
こゝハ一部しくゝ這こと計ゝハ叶へまじかゝ云妾の言に窓ひを関入
るくゝハ詮なくゝ其方の命を取ゝんぞと半夜怒りくゝ入ゆれば
將氣の胸ゑ代くゝ衣も今ハ怖さも打忘れ妾がヤせし入沢を伊入

りに入ハ身こそ難面けれ此上ハ妾が一命召くゝ召くゝも采男さまゑ
を替がし恨ハ怨こゝ多へいし怒りハいうで中絶人こ言を發てば
汀の幽霊面色忽ち凄しくゝ悪に女の返答ゑよくゝ汝ゑこの
恨こ今ゑ想ひ知ぶせんぞと確と瞋くゝ其ゝゑ象ハ失せしこ
こへ覚ぐ代くゝ衣悪寒くゝ身の毛立てれり發熱夥しく夢中ゑ
なりくゝ口走り狂ひ迷ひ采男も此こと少しも大ゑ驚き走せ
寄り容躰を看くゝあれば代くゝ衣宋男を八打と瞋跟怨めしゝ
采男どの汀ゑくゝ行ゑぞや妾ハ身に怨慕ひ上総のゑゑ
空しくゝ形しうど憑し床しくゝ一念のこゝゑ刹ゑ動靜を観ぜば
情なや早こ捨置代くゝ衣の色香ゑ迷ひ二世の約束姫しくゝ

代く衣ふさまく想ひ停まんと云閑されどもうひうぞ今ハ此の
の怨より此代く衣の恨めしく憎さも悪しく取殺しく予が念
晴さんと想ふのふう斯脳しく代くふるりれ身ハ流石寂寞く取殺
まぐれ存念なし今ゝうゝ改めく再び帰参做しまく此女を
今宵の中妾一命を取畢ぬと代く衣の面色凄しくに走るふ
ぞ采男ハ何と返答も人くのまの前とい面目失ひ延長く既ふ
其夜ふりしぶ代く衣半臭睡うとく侍りしゆゑ看病の人く
も攘し此間ふ休息せんと衆皆次へ立くれ跡雛妓一個傍ら半
睡夢くちふ看病做しくありけれ夏ふ労まく疲入る代く衣
の枕のもとまある懼しや汀の容象幻のごく立あらまと髪を

荊蕀ふ揺乱し眼迸釣色青ざめ痩せ果くれ顔ふく代くぶね
のふしたれ上ふ乗よとこへけれが喉ふ喰跟呼と苦しもを起しも
立ぞ嘗一口よ喰殺し今ぞ怨と晴しねとにのもうも血ふ染と
くれ顔揮揮く呵くく笑ひし顔色えるうく傍の雛妓ふ跟
呼と叫びく其侭ふ魂飛く氣絶ると此の音ふ何ぞと人く
走寄観くあれば這者如何代く衣を血ふまれ雛妓諸
息絶くありめる故氣跟よ茶と噪動し分色ふしく呼生れ
と代く衣を疾言切まく更ふ答へあくざりしが雛妓を漸ふ
ふ跟ありし動静ふ語るあぞ衆皆奇異の想ひをは采男も此
ふ走ふり今ハ何とう包んと二個の女ふ契りしてけ逸くふ説話を

泪を流せば此上を両個の後懇ろ吊ふなど亡者のなぐさみ仏とん
と主の勧めふ流石代衣の亡骸より尼が此支を浦へしひ
贈つ吾川采男も發心なり今より一生女犯を慎み君へ
功を立て後浮世を遁れ黒染の出家となるべし両個の追薦
供養為べしと茲より此所を立出て暗ふ鎌倉のかくれ
趣きまうれ

自來也説話後編巻之二畢